



名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/goken/>

— '01 公開講座「言語」のご案内 —

愛知大学言語学談話会

2002年
1月12日 「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語」
田川光照(愛知大学経営学部教授)
「漢字文化圏における表音文字の背景」
陶山信男(愛知大学名誉教授)

編集後記

移動がたやすくなった時代、外国語一つ覚えておけば、世界が広がることは確かである。

それにしても新しい言葉の修得は、難しいものだ。今回寄稿いただいた先生たちは、困難を乗り越えようと様々な苦勞をされている。教材も機器も機会もふんだんにある現在とは違って、なにもかも乏しく、外人教師に学ぶ機会のごく限られていた時代だった。朔太郎ではないが、25万もすれば、アルバイトが一日500円の時フランスへ行くことなど学生の身分では途方もないことだった。このようなとき重要なのはただ意志の強さ、絶対に物にしてやるとの固い決意である。須藤先生のもがくようなご努力、大島先生の今なお突き進もうとされているお姿には敬服する。

ついだから、編者の学び方も紹介しよう。先生たちと同じ世代だから、もちろん劉先生の言われる書面語の修得中心の方法である。学校の授業はまことに歯がゆいほどゆっくりだった。読本の範囲も狭いのが普通だ。このままではいけないと思い、文法を終わって最初に取りかかった原書はジッドの『狭き門』だった。独習テキストが決まった。訳本を買ってくる。テキストの訳を書き記す。一日の終わりにその訳を訳書と照らし合わせて、間違いを訂正する。思えば無謀なことをしたものである。恐ろしく難しかった。しかしこれを終わったときの喜びは大きかった。祝杯をあげた。恋愛小説の名作を読んでしまえ、と我が身に言い聞かせて、あとはモッパッサンの短編、『クレージュの奥方』、『アドルフ』、『マノン・レスコー』は電車の中で読んだ。夏休みにはスタンダールの短編、『赤と黒』、『パルムの僧院』と続いた。恋愛小説ではないが、ネルヴァルの『オリент紀行』はおもしろかった。以上が4年生の夏までに読んだ編者のフランス書である。恋愛小説の傑作、バルザックの『谷間の百合』は、草木の名前に閉口し三分の一までで投げ出したまま現在に至っている。

力が付いていくのを実感できることほどうれしいものはない。インテンシブに若いときのやってこそ上達するものだ。卒業すれば、時間がないことははっきりしている。今が実力を蓄えるときだということを忘れないでいてほしい。

(S・K)